

特
集

葉とらずりんごに迫る

高齢化と労働力不足の背景



●葉とらずりんごは、食味の良い「こだわりりんご」として、一定以上の糖度で当JAも取組み、食味重視の生産指導を徹底することで、市場や消費者からの認知度や評価向上を図っている。



リンゴの美味しさを追及し、葉摘みを行わないことで高糖度を誇る「葉とらずりんご」。それは外観重視よりも味の良さを売りにした「こだわりりんご」として取組みが進んでいる。

一方、農業経営は所得向上に向けた経営改善として、生産者の高齢化や労働力不足を背景に取組拡大への傾向が見られる。

作業効率の向上と着色管理に重点を置き、葉とらずサンふじに迫る。

葉とらずリンゴで金を取る方法とは… 省力化で高値精算に期待



割ってみると「蜜」がたっぷり入り、美味しさが凝縮されていた



数回のツル回しで着色管理



箱詰めされた「特選」の葉とらずサンふじは葉形が勲章

味の追及が生んだリンゴ

リンゴ生産者は、「美味しう」をコンセプトに様々な工夫を重ねて消費者のニーズに答えてきた。リンゴが売れるためには、品質が良いことに加え、消費者ニーズに合致してゐる必要があることから、消費者が求める「旨さ」を重視した「蜜入り」で甘いリンゴへと結びついた。当然、果実の表面に葉形が残り、ムラなく赤く染まったリンゴには見た目が劣るものの、旨さは格別であり、まさに葉形は

「勲章」としておなじみだ。この「**旨さの増加**」の増加

最近のリンゴ消費動向は、安全・安心は基より、着色や大きさ、味、芳香など外観と内容がともに優れている「高品質りんご」、特別栽培や葉とらずなどの「こだわりりんご」など多様化してきている。葉とらずリンゴは、その名のとおり「葉摘み」を行わない栽培方法で、葉が太陽を浴びてリンゴに養分を送っていることから糖度が増し、美味しくなる。良食味で高品質なリンゴ生産を基本としながらも、様々な消費者ニーズに対応した付加価値の高い商品づくりを進め、販売戦略を考慮したリンゴ生産は収益性向上に繋がっている。

省力化について

近年、高齢化や労働力不足に対応して、着色管理等の省力化を図るため、葉とらず栽培の取組や黄色品種への改植が拡大傾向にある。10aの葉とらず栽培で、労働時間110時間という省力栽培を実現した事例もある。取組みに当たっては、適正な整枝剪定などにより、樹勢及び受光態勢の適正化を図ることが重要である。



同じ日当たりの場所に並ぶ樹でも、系統によって着色の差が一目瞭然である (10/25)



普通系統については約2週間後の着色がさほど変わりなく進んだものの、糖度13を超えていた。また、ツル回しによって葉形はなく、色薄でも美味しいリンゴであった。(11/8)



葉が黄色になると収穫の合図になる。ツル回しは1回のみ。



葉と「れ」ず



葉と「ら」ず



着色系統は葉摘みなしでも容易に色付く

今回は、当JAに葉とらずサンふじを在庫している成田由弘氏(紙漉沢地区)の園地を紹介しようと思つ。

各園地の特性を活かして、いかに効率よく作業を進めるかなどを参考にしてもらいたい。考え方は無限大である。

本心は傾斜地を「葉とらず」にしたい

葉とらずリンゴについては、色付きの良い系統を選ぶことによって、作業軽減にも繋がっていた。

成田氏の園地は平地に着色系統の「ふじ」があり、傾斜地に普通系統の「ふじ」がある。本心は傾斜地での作業が重労働になることから、葉とらずサンふじを傾斜地で栽培したい

と話す。しかし、あえて平地の着色良好である系統を葉とらず栽培することによって、あまり手を掛けないでも着色良好に進み、他の晩生種の作業にも手を回すことが出来ていると話してくれた。

また、着色が容易であるため、ツル回しの回数をこなさなくても特選級のリンゴが生産でき、高値精算にも結び付いている。

樹形改善で葉形のない葉とらずリンゴも

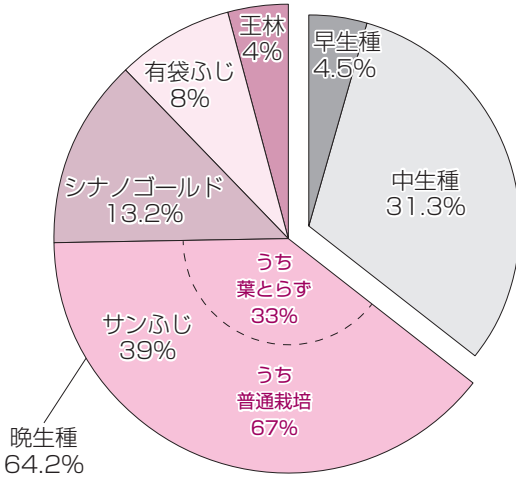
着色管理において、剪定による樹形の改善や支柱入れ、徒長枝整理など受光態勢を整えることを基本としている。また、成田氏は9月中旬のすす斑・すす点病の薬剤散布後、すぐに反射資材を敷くようにしてツル回しを1回だけで綺麗に着色できていると話してくれた。

さらに、作業効率を上げるためにも、低樹高化が基本となっている。

成田氏の概要

労働力	家族	4人
	通年雇用	1人
	農繁期	人夫3~4人
園地面積	270a	

成田氏の品種構成割合



ワイ化栽培における高品質な葉とらず「ふじ」生産のための光条件と樹勢

適正な光条件と樹勢		果実品質目標	
光条件	樹勢	赤色度	糖度
相対日射量 30%以上	樹勢 3.5以下	80以上	14.5%以上

葉とらずサンふじ選果基準

上実	クズ
56玉以上180g以上	

上実とクズのみで入庫とし、特大・大・小込みである

る。また、収量と品質、作業性は相反している。収量を上げるために、樹冠を大きくすると、樹が高くなり隣接樹と交差するなど管理に苦労するほか、果実品質の低下を招くことから、整枝剪定に当たっては、省力栽培に向く樹形として、骨格枝の数と配置、樹高、樹冠幅、成り枝量と配置、樹勢の適正化などに配慮する必要がある。(具体的に、結実部位の高さは1.8mの脚幅で届く高さ3m程度とする。)

「葉とらず」と「葉とらず」

葉とらずサンふじの精算単価ランキングの上位と下位を比較してみると圧倒的な価格差があり、葉

とらずサンふじの高値精算は一箱あたりのサンふじの単価を上回る生産者もいる。これは、サンふじで葉形がついて秀Aまで落ちること、葉とらずサンふじで葉形がついても着色良好であれば特選となる可能性もあるからだ。しかし、ただ単に葉形がついたサンふじを葉とらずサンふじとして入庫してしまうと、最初から葉とらずサンふじとして栽培しているリンゴと食味に大きな差がでている。糖度と旨みは、かけ離れたものであり、葉と「れ」すサンふじとしての入庫を背景に単価の差が大きく開いていると感じる。葉とらずリンゴ

は一定以上の糖度で光センサーにより選果していることから、旨さを満たさないものや葉形が酷いものは省かれるため、着色管理が間に合わなかったリンゴではなく、葉摘みの時期からしっかりと計画的に葉とらずリンゴを栽培して高値精算に期待していただきたい。

労働賃金と作業時間を視野に

葉とらずリンゴは、人手が多にかかっている葉摘み時期の低コストに向けた経営改善でもある。しかし、10aあたりの葉摘みに5日以上かかることを想定した場合であり、葉摘み作業が順調に進み早く終わることが出来ている場合

は、サンふじとして栽培している方が精算に期待できる。担い手不足で省力化を選ぶかどつかは、園主にゆだねられているのだ。

省力化と高値精算を結び付けるためには、ツル回しのひと手間をかけることが着色良好につながる。また、葉とらずりんごの品質向上で、販売単価が上がることで高値精算にも繋がるため、消費者ニーズに応えることが力ギを握っている。当JAは、ひと箱でも多く入庫していただくためにも、全力でサポートしてまいります。